

Web Column⑥ 世界における格差とフェアトレード (初版の Column⑪)

世界の富の偏在はすでに常識かもしれないが、それがどの程度であるかはあまり実感できていないかもしれない。本書のウェブサポートページ(第11章解説動画)にアクセスすると、ワールド・マップパー(<http://www.worldmapper.org>)が作成した、① 国内総生産(GDP)を通貨レートで調整した国際購買力で表現した世界地図、② 人口分布で世界を表した図などを参照できる。これらを見ると、富は北アメリカ、ヨーロッパ、日本に集中し、人口の多いインドや中国、アフリカ、ラテンアメリカなどはまだまだ貧しいことがわかる。

このような世界の現実をふまえ、アメリカの社会学者・歴史学者であるウォーラーステインは、世界システム論という議論を展開する(ウォーラーステイン, 2013)。それによると、世界は中心・半周辺・周辺という区別ができ、それぞれで役割と生産の形態が異なるという。なお、この区別では日本は中心に属するとされる。

資本主義を機軸とする世界経済においては、生産活動の利潤の分配は高度な産業を発展させている中心に集中し、半周辺・周辺は収奪される。具体的には、周辺にある国々は、中心に対する原料や食料といった1次製品の供給地としての役割を果たす。例えば、コーヒー豆ならコーヒー豆だけに特化してしまう単一産業化が進む、いわゆるモノカルチャー経済の状態に陥る。モノカルチャー経済になると国際市場の価格変動によって国家の景気が大きく左右されてしまう。例えば、急にコーヒー豆に対する需要が中心で減少すると価格が下がる。また、ひとたび害虫が発生するとそれが経済を大きく不安定化させ、国民の多くが仕事を失って食べることもままならない事態になる。

こういった状況を打開するために、先進国と途上国との経済格差を解消するもう1つの貿易のかたちとして「フェアトレード運動」に注目が集まっている。フェアトレードとは、途上国の原料や製品を適正な価格で、かつ継続的に購入することにより、立場の弱い途上国の生産者や労働者の生活改善と自立をめざす貿易のしくみを指す。例えば、コーヒー豆のウォッシュドアラビカの場合、最低価格が国際市場価格よりも高く設定され(1ポンド=約454g当たり1.40米ドル)、また、その価格に20米セント/ポンドの地域の開発や環境保全のために使われるプレミアムが付加される。フェアトレード商品を買うことが世界の格差問題を魔法のようにただちに解決することはないだろうが、私たちが国際関係にかかわる1つの入り口かもしれない。

●引用・参考文献

ウォーラーステイン, イマニュエル/川北稔訳 2013『近代世界システム』I~IV, 名古屋大学出版会。